



煙草が知らせ る危機



川崎ゆきお

「ほほう、煙草が知らせたのですか」

「そうなんです。煙草を危機を知らせたのです。警告してくれたのです」

「煙で、あなたの居所を教えた……などと、私は最初に、そう考えましたが、場所はどこです」

「いつも行く喫茶店までの道すがらです」

「道すがら？」

「歩道です。自転車で、そこを走って行きます。人が歩道にいと、通りにくいので車道に出ることもあります」

「では、煙草の煙はのろしのような合図にならない」

「のろし？ そうじゃありません。煙草が吸えなかったのです。だから、煙はありません」

「ほう。じゃ、何ですか。それより、私は先に想像を働かせて、勝手なことを言いました。よくあなたの話を聞いてから、お答えします」

「はい」「どうぞ続けてください」

「ポケットにあるはずの煙草はあるのですが、箱だけです。一本も残っていなかったのです」

「箱に入った煙草なんですか。私の吸っているのは、薄い紙で簡単に包んだもので、四隅がしっかりあり、硬い紙ではなく、安っぽい紙ですので、箱型をしています。所謂ボックス型じゃないのです。紙が薄いのですよ」

「あのう」

「あ、失礼しました。また余計なことをお話ししました。続きをどうぞ」

「煙草が切れていることを、忘れていたのです。テーブルの上に置いてある煙草とライターをポケットに入れ、外に出ました。だから、煙草を忘れて出たわけではありません」

「忘れたのは、煙草の中身で、忘れなかったのは箱なんですね」

「どちらでもいいですが、気付かなかっただけです」

「それに気付いたのはいつですか」

「はい、部屋から出てしばらく走りますと、大きな車道に出ます。そこを渡り、その危険な横断を終えた後、ポケットから煙草を取り出すのが癖なんです。いつも、決まって駐車場を右に見ながら、側溝におかれている自販機の前あたりになります。自販機をやや通過することもあれば、その手前の場合もあります。誤差はその程度です。そこで、煙草の箱を取り出し、一本抜こうとしたら、ないのです」

「はい、非常に丁寧な説明で、目に見えるようです」

「それで、道を選ぶ必要に迫られました。煙草を売っている場所は、戻ればあるのですが、せっかくあの危険な大きな道路を渡ったのですから、また渡り直すのはいやです。それに方向が違います。目的地の喫茶店への距離が長くなります。そういうとき、喫茶店と同じ方向にある店で煙草を買うように、決めています。喫茶店でも吸います。だから、一本や二本残っているだけではだめなんです。最低五本は必要です。そういうときは分かっているので、喫茶店近くの店へ先に寄るようにしています。今回もそれになりましたが、予定外です」

「危機を知らせるとは、どういうことですか」

「今その下りに入ったところです。余計な話をしていたわけではありません。今、今、話そうと

していたのです」

「ああ、出鼻でしたか」

「その出鼻です。危機とは」

「ほう」

「いつもと違う。つまり、煙草が切れていたことを、煙草が知らせただけではないのです。空の煙草の箱が知らせたのは、危険だと」

「それが、どうして危機だと」

「いつもと違うことになることを、予感しました。これは悪い予感です。でもそのときは、そのお知らせをあまり気にしていませんでした。煙草屋に寄った後、喫茶店へ入るコースを選んだのです。具体的には、もう少し先に四つ角があり、直進すれば喫茶店ですが、煙草を売っている店は右折し、さら左折して直進するのです。この場合、喫茶店への道と筋違いで並行して走る感じになります。つまり、少し右寄りの場所に煙草屋があるのです。この筋は、滅多に入りません。先ほど説明しましたように、煙草の残りが数本するとき、この筋を利用します。でもそれは年に何度もありません。なぜなら、煙草の予備を鞆の中に入れておくことが多いからです。今回は、予備なしで、残りもなしです」

「はい」

「問題はそこからです」

「続けてください」

「先ほど出鼻と言いましたね」

「はい、聞きました」

「直進するコースではなく、右折し、そのあと左折しようとした瞬間、つまり、出会い頭、車と接触しかかったのです。狭い道です。きっとその筋沿いにあるマイカーでしょう。そんな車がすーと入ってきたことに気付きませんでした」

「あのう、煙草が危機を知らせるという話なのですが」

「まさにそれです」

「どこが」

「いつもとは違うぞ、と警告してくれたのに、それを無視したのです」「はあ……」

「つまり、交通に気を付けろと言うことを、煙草がお知らせしてくれたのです」

「うーむ」

「何か？」

「いえいえ、そうおっしゃるのなら、そうなのでしょう」

「ですよ」

「ただ、単純に言えば、いつもの道とは違う道に入ったので、勝手が違うので、安全な場所、危険な場所が分かりにくかったのではありませんか。いつもあなたが通っておられる道なら、勝手知ってるだけに、危機はすぐに分かる。また、危険な場所は、もう分かっているので、無意識のうちに、その手前でスピードを落とす。とかです」

「そうとも言えます」

「まあ、いつもと違うパターンに入ったときは、注意が肝心と言うことで、いいでしょうか」

「はい、賛成します」

「じゃ、今日は、このへんで」

「ありがとうございました」

了